【四国新聞社賞】

学校に行けなくなった僕

坂出市立東部中学校　三年　【非公表】

僕は、中学一年生の二学期から次第に学校に行けなくなりました。中学校に入って親との関係が難しくなりました。僕なりに勉強も部活も頑張っていたつもりだったけど、両親に認めてもらえませんでした。学校の友達関係も悪くなり、心がすさんでいきました。体が重くなり朝、起きられなくなりました。心配した父は、僕を病院に連れていき「起立性調節障害」と診断され、薬を処方されました。薬を飲みながらしばらくは五月雨登校していましたが、十月にさらに友達関係が悪化し、完全に学校に行けなくなりました。

学校に行けなくなった僕と勉強の遅れを心配した両親は、仕事を遅刻しながらなんとか僕を学校に行かせようと必死でした。不登校について理解のない祖父母とも関係が悪化していきました。僕は学校に行こうとなんとか制服を着て玄関まで行きますが、体に力が入らず、崩れ落ちていきました。とうとう僕は二学期末テストが受けられず、毎日寝て過ごしていました。十二月に入り、引きこもりを心配した両親が、隣の中学にある教育支援センターに連れていき、週に二、三度一時間程度通い始めました。そこで本を読んでいました。教育支援センターから帰った後は、ゲームをひたすらしていました。ゲームにのめり込んだ僕は苛立つことが多くなり、家族とのけんかが増えていきました。

それでも母は僕の逃げ道を残すためゲームを制限することはありませんでした。この時、両親は学校に行けなくなった理由を、僕の性格や学校などのせいにしていました。しかし、両親は学校の先生に勉強のこと進学のことを相談していました。

二年生になり、自分が通っている学校にも教育支援センターが開設され、週に三、四日一時間程度通い始めました。母はなんとか教室に戻そうと、担任の先生と教室復帰できそうな日を相談していました。校長先生はじめ先生方も勉強を教えに来てくれました。小学校の担任だった先生も僕を心配し手紙を書いて励ましてくれました。

僕が不登校になってから母は不登校について、いろいろ調べていました。不登校について学んだ母は、ある時不登校の原因に気がつきました。不登校の本当の原因は「自信の不足」であり、自信が不足している状態のときに学校できっかけがあれば不登校になるようです。だから、不登校になった原因が僕の性格の問題でないこと、怠けていないことを母は理解してくれ、そのことについて聞いた家族も理解してくれました。

母は、朝起きられたこと、晩御飯の片づけをしたこと、学校に少しでも長く行けるようになったこと、教室に一時間でも戻れたことテストを受けられたこと、給食を食べて帰れたことなどささいなことでも毎日ほめてくれるようになりました。そして七月以降、教育支援センターを休むことはなくなりました。

二学期に入り、相変わらず教育支援センターに通う日々は続いていましたが、徐々に教育支援センターで過ごせる時間が増えていきました。十月には学校の職業体験があり、動物病院に行きました。ここで先生や友達の支えもあり三日間通えたことは、僕の自信になりました。また、祖父母がミカンを作っており、その収穫作業を手伝うことで感謝され、人の役に立っていることを実感し、さらに自信がつきました。勉強は少しずつできるようになり、定期テストの成績も徐々に上がっていきました。学校の先生も教室に復帰しやすいような態勢を整えてくれて、冬休み前には教室で給食を食べられるようになりました。

三学期に入り、両親や担当の先生から完全に教室に戻るよう促され、

教室で過ごす時間を増やしていきました。クラスの友達にも温かく迎え入れられ、一週間もすると朝の会以外のすべての授業に復帰しました。そのうち、遅刻せずに歩いて通学できるようになりました。僕の不登校生活が終わりました。不登校だった一年三か月は、授業をほとんど受けることができず、学校行事にも参加できず僕はもがき続けました。その間、母は学校に行き、教室に戻るようにずっと僕の背中をさらりと押してくれました。

そして三年生になり、授業に参加できる喜び、友達と話せる喜び、学校行事に参加できる喜びを感じながら、毎日楽しく学校生活を過ごしています。僕が教室に復帰できたのは、両親、家族の支えと担任の先生、学校の先生、友達のおかげです。

僕も将来は人の役に立つ仕事について、両親や家族のように人の人生の支えになれる人になりたいと思っています。